文学大会「詩」　小中学生の部

（優　秀）　小　学　生　の　部

さつまいも

水戸市立下大野小学校　二年　　石川　晴一

さつまいもを
うえるとき

すべって　どろどろ
長ぐつ　ぐちゃぐちゃ
手ぶくろ　ぬるぬる
ぜんぶ　どろどろ
きもちわるい

ぜんぶあらって
きもちいいな

やきいもほくほく
たべたいな

【講　評】
さつまいもの苗植えでの体験を豊かな感性で捉えています。「どろどろ」「ぐちゃぐちゃ」「ぬるぬる」といったオノマトペにより楽しいリズムが生まれています。

さくらんぼ

水戸市立常磐小学校　三年　　岡田　蓮音

やっと来たさくらんぼのきせつ。
さくらんぼってすっぱいな。
でも、しるがはじけておいしい。
口の中でしるが、ずっとこの味をまっていた。
ずっと、ずっとまっていた。
すっぱいほどおいしい。
おいしい。
おいしい。
さくらんぼ。

【講　評】
待ち望んでいた、大好きなさくらんぼ。一口食べたときの感動が、臨場感あふれる描写で表現されています。おいしそうなさくらんぼの様子に、どれくらいの大きさなのだろうと読者の想像がかきたてられます。

さくら

水戸市立上中妻小学校　三年　石田　結衣菜

春のさくらは
ピンク色
花びらひらひら
風にゆられておどってる

夏のさくらは
みどり色
葉っぱがたくさん
すてきだな

秋のさくらは
あかい色
葉っぱがきれいに
だいへんしん

冬のさくらは
ちゃいろい色
木だけになってさびしいな
でもね
本当はさびしくないよ
だって
新しいめがじゅんびしてるもん
さくらはずっと生きてるよ

【講　評】
それぞれの季節の色の対比が心地よいリズムを生んでいます。寒い冬でも、葉が落ちても、新しい芽を出し続けるさくら。生命力の強さが感じられる詩です。

きんぎょ

水戸市立下大野小学校　三年　立原　陽菜

えさをあげたら
すぐえさを
パクパクたべにくる
たくさんたべるから
いそがしい
たべているところは
かわいい

【講　評】
えさを食べる金魚の様子をよく観察し、感じられたことを素直に表現しています。「いそがしい」という言葉から、金魚がとてもえさを待ち望んでいたことが分かります。金魚への愛情が伝わる、かわいらしい詩です。

さくら

茨城県立盲学校小学部　五年　岡田　野乃花

春はさくらのさくころ。
あたり一面さくら色。
池に光が反しゃして、鏡のように、
きらめいている。

【講　評】
一面に咲く桜の華やかさや、きらめく陽の光の暖かさを感じることのできる詩です。春になった喜びがよく伝わってきます。春の訪れを全身で感じている野乃花さんの横顔もきっときらきらきらときらめいているのでしょうね。

空と海

水戸市立常磐小学校　五年　石田　晴大

海と空がつながった。
空の青がきれいだな。

春の夜の空すずしいな。
海も静かにねむっている。

夏の空は青々と
海の上にも広がって
入道雲でつながって

夏の夕方夕やけ空が広がって
赤とんぼがとんでいる。
海にうつる夕ぐれは
とってもとてもきれいだな。

夏の夜空は
星が一面びっしりで
空と海がつながった
ああ、きれいだな。

秋の空はきれいだな。
こう葉した葉がふってきて
空にひらりとまっている

秋の夕やけ赤とんぼ
きれいに重なり
うつくしい。
秋の夜空は
少しさびしく
かわいそう。

冬の空には
雪がしとしと
ふっていて
海もつめたく
さびしいな

冬の夜空に
大三角形が見えている
空がきらきら
うつくしい。

いつ見ても色いろな顔の空と海

【講　評】
雄大な自然を細やかに観察する作者の感性が素晴らしいです。どの季節にもそれぞれ表情があって面白いですね。七五調を意識したことで、詩に心地よいリズムが生まれています。晴大さんはどの季節の空と海が好きですか。

雨とほし

水戸市立吉田小学校　六年　川松　美緒

しずくが落ちて　ほしみたい
みてみて　ほしに　手がとどく
とてもきれいな　しずくのほし
まるで小さな
うちゅうみたい
雨の日は　夜と友達

【講　評】
作者は水たまりの中に落ちるしずくを見ているのでしょうか。小さなしずくが落ちる様子を広大な宇宙に例えたところに発想の豊かさを感じます。「みてみて」と友達に呼びかけ、雨の日を楽しんでいる様子が伝わります。

リレー

水戸市立吉田小学校　六年　長神　文苗和

どんどんと
つないでいくバトンたち
心一つになるまでに
どんどんと

【講　評】
リレーでは、バトンをつなぐのと同時に心もつないでいくのですね。「どんどんと」を重ねることで、次々にバトンがつながってスピードが上がっていく様子がよく伝わってきます。爽やかな疾走感を感じられる詩です。

（優　秀）中学生の部

ペン

水戸市立第五中学校　一年　金子　史織

一本のペンがあれば
なんでもかける
一本のペンがあれば
夢を描ける
一本のペンがあれば
話ができる
一つ一つの重なりが
私達を未来に連れていってくれる

【講　評】
「一本のペンがあれば」をくり返し使うことでリズムが生まれています。「なんでも」「夢」「話」と変化させることで、一本のペンから広がる未来への無限の可能性を感じることのできる作品です。

今

水戸市立第五中学校　一年　髙橋　立起

中学生は小学生に
高校生は中学生に
大人は子どもに戻りたいと言う

今を楽しもうよ

【講　評】
何かを言い訳にして今を楽しめない人にとってこれほど痛烈なメッセージはないのではないでしょうか。二度と戻ってこない今を精一杯生きようという思いが伝わってきます。

体操という種

水戸市立第二中学校　二年　石井　希歩

体操という種をまき
努力という肥料をやる
汗という名の水をやり
そして勝利という

輝く輝く
花が咲く

種からできている私だけど
輝くいつかは
花のように

【講　評】
擬人法を使って体操にかける思いを巧みに表現しています。また、倒置により「私」の静かな、しかし熱い決意も伝わってきます。どのような花が咲くのか楽しみですね。

根強く

水戸市立第二中学校　二年　佐藤　鉄舟

俺は花壇に咲いている花とは違う。
固いコンクリートに細々と立っている
雑草だ
いつも俺は皆に気づいてもらえず
ドスンドスン　と
踏まれている、
それでも俺は花咲く日まで
根強く生きる

【講　評】
場所を選ばず力強く生きていこうという強い意志を感じることができます。また「細々と」と「根強く」の対比によって、よりその思いが強調されています。

りんご

水戸市立第二中学校　二年　高倉　恵

りんごって一つ一つ色が違う
りんごって一つ一つ味が違う
りんごって色はよくても味が悪い時がある
その逆も
なんだかそれって人間みたい
人間って一人一人見た目が違う
人間って一人一人性格が違う
人間って外見はよくても性格が悪いときがある
その逆も
人は言うかもしれない
おいしくないりんごもあるよって
でもりんごは少しずつおいしくなるんだ
それに他の人にとってはおいしいかもしれない
人間もそうなんじゃないかな

【講　評】
人間の個性をりんごにたとえる感性が素敵です。見た目だけで判断してはいけないということや、未来の可能性について考えさせられました。また、対句にすることで印象深い仕上がりとなっています。

春の憂鬱

茨城中学校　二年　冨永　すみれ

春は、おれの肩にもたれかかる。
空の原子はたしかに重い。
群れをなしている桜は、
暗い顔をして遠くから、
ぢっと街を観察していた。
藪の中の鳥の声は、
風を生ぬるくした。

灰色のどんよりとした春の中。

【講　評】
春は様々な変化がある季節です。そうした変化に適応しようと悩む姿が浮かんできます。「原子」「桜」「鳥」に擬人法を用いることで、五感を通して春のまぶしさに圧倒されている様子がうかがえます。

私は・・・

茨城県立盲学校中学部　三年　フロレス　アンジリン　ユ

自然の魅力を探しに旅に出よう
人間ができることと
自然ができることの違いを知るために
旅に出よう

私は太陽
みんなに元気を送る輝き
心の奥まであたためる優しい太陽
だから私を浴びて

私は風
みんなに強さを送る応援団
葉をゆらゆら揺らす穏やかな風
だから私に包まれて

私は星
暗闇を照らすあかり
みんなを支えるために月とともにいる星たち
だから一人ではないよ

【講　評】

自然の声に耳を傾けて、そのメッセージを受け取ることができる感性が素晴らしいです。自然の大きな力を擬人法を使って豊かに表現しています。また、同じ形式で書くことで変化がより鮮明に表れています。

文学大会「詩」　一般の部

優秀（第一位）

体温

田口　敏

これが頭で　ここが顎です
四日前の人が四日後には
白い骨になった
凡そ人の形は無く
柔らかな熱と
大方は白い灰が残った
よく見ておけ　と
沈みたる現実に
届く言葉が
ぼやけた灯りの中に混っている
一体は
小さな壺に納まり
八十八年から開放されると
穏やかに笑むのだろう

再びは無いのだが
木箱から伝わる熱が
私の体温と
頻りにつながろうとする

【講　評】

火葬された人への深い悲しみが、静かな言葉で的確に捉えられている。〈柔らかな熱〉、〈穏やかに笑む〉といった表現が、故人の死の穏やかさを伝えている。小さな骨壺が、有限な生からの解放としても、その余熱が作者の体温となおもつながろうとする結びは、去り行く死者を身近に引き寄せていて、感動的。

優秀（第二位）

A stranger in paradise（楽園のよそ者）

茨城県立水戸聾学校高等部　三年　吉水　聡美

I’m a stranger in paradise
耳が聞こえにくい私
今までその人生を
自分のハンディキャップを
憎んできた
あの時までは

I’m a stranger in paradise
あの時私は漂っていた
どこの島にも行き着けず
孤独の海を漂って
生まれた時から
ハンディキャップを憎み続けてきた

I’m a stranger in paradise
ついに新しい国にやってきた
決して後戻りができない新しい国
「手」が主言語のその国
パスポートなしで入れる異国に
私は入国した

I’m a stranger in paradise
同じようなハンディキャップを抱えた
その国の住民たち
しかし話すことはできなかった
同じものをもった
「仲間」のはずなのに

I’m a stranger in paradise
ある時
住民の一人が「文字」を書いた
私も「文字」を書いた
住民との間に
「繋がり」ができていった
「文字」を通じて

I’m a stranger in paradise
私の心に
新たな勇気が湧いてきた
「主言語を覚えよう」
そして半年で主言語を覚えた

I’m a stranger in paradise
私は恋に落ちた
言葉は喋らない
しかし笑顔が素敵な彼に
あの時優しく主言語を教えてくれた彼に
そんな彼に恋をした

あれから長い時が経ち
入国時とは全く違う私に
生まれ変われた
ハンディキャップへの憎しみも
いつの間にか消えていた
それはその国の住民のおかげ
彼も含めた優しい人たちのおかげ
I’m not a stranger in paradise!

【講　評】

耳にハンディキャップを持ったことで孤独を感じていた作者が、手話や「文字」という主言語をもつことで社会と連携し、恋をし、喜びの生に至るという経験が、孤独の海の漂流者の物語に寓話化され、リフレインのリズムによって歌となり、広く普遍的なものになっていく。とても良い詩。

優秀（第三位）

侵略者

松美　仙魚

この町の女たちは卵を産み孵化させることで赤ん坊を育てている。何百年も何千年も前から続いている営みは争いのない平和な町を維持するための根幹だった。男も女も兄弟姉妹であり親類だった。誰もが同じ顔をして同じ方を向いていた。未来は常に過去からの延長線上にあり線路のように続いていたから誰一人疑うものなどなかった。山と川と海に囲まれて外の世界を知らない彼らには敵の存在など思いもつかなかった。毎日が平穏で長閑な暮らしは永遠に続くものと信じていた。

空を飛ぶ何者かが町に降り立ったのは彼らが寝静まった深夜のことだった。寄り添って眠る女たちの側にそっと忍び寄り夜這いをするものがあった。異形の者たちは確実に女たちに精を放ち妊娠させた。夢現のうちに卵を産み抱卵する女たちはいつもどうりに赤ん坊を育てている。他のものより成長の早いそのものは後から生まれた赤ん坊を食い殺し彼らの子に成りすました。

日毎、夜毎、殺戮は繰り返し、繰り返されて、平和な町はアトカタもなく消えた。もう男も女も同じ方を向かない。誰れも彼もがバラバラな視線を宙に這わせて未だ見ぬ外の世界を物色している。

【講　評】

顔も行動もまったく同一で、対立も争いもない集団が、戦闘的な集団に乗っ取られ変貌していく蜂の世界を、人間社会に重ねて寓話的に語る SF 小説のような戦慄的な詩。